

TS転生女神だけど、臣
民達がもっと搾取して
欲しいって目で見てく
る

銀幕の臣民

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女神に転生した私がこの先の国を生き残らせるためには。

なお、なんか知らないけど臣民からの好感度は空景気な模様。

どうなってるすかね、これは……？

こちらはR18作品です。

<https://syosetu.org/novel/304301/>

内容がかなり過激なので、特に人間君が可哀想な目に合うのが苦手な方はご注意ください。

目次

極東らしいクソ仕様	1
流石パンジャン汚い	7
対外的な脅威に備えよう!	14
銀幕茶会事件	19
開戦の狼煙	26
天岩戸	31
神々の遊戯	42
永遠の典	47

極東らしいクソ仕様

この世界に転生してから既に300余年が経過した。

それだけの時間が経過すればある程度諦めがついて来る。

女性の身体にも慣れたし、女神たるこの肉体の扱いも分かってきた。

とはいえ神の中では最も若い存在である自分が出る事と言えば、戦いではなく政戦である。

だからいつもよその国から襲われるのではないかと言う恐怖に怯えながら暮らしている。

実際、産まれて間もない頃はずっと胃が痛かったし、今でも自分の統治している国が島国である事を何度も感謝している。

さて、通称「パイリム」と呼ばれるこの世界には不思議な法則が存在する。

それは、神が統治する国はその神の理想がそのまま投影されるといふ事。

例えば学術王国と呼ばれる「ルザン」では女神「ソラス」によって学徒が安心して学びを受けられるようなシステムが構築されている。

学校というものがある国は結構珍しいし、学びを重点にしている国は「ルザン」くら

いだろう。

そしてそんな「ルザン」は外的脅威に対して問答を行う事によりそれらを排除する事が可能だ。

さながら古代エジプトのスフィンクスのように。

そして回答を間違った者に対して「ルザン」は絶対的な断罪権を得るような『法則』が働いている。

……「ソラス」が統治する「ルザン」以上に賢い国がない以上、あの国を攻め落とすのはほぼ不可能とされていた。

この世界における大国は大抵そんな理不尽な法則を抱えていて、だから小国は大体逆らえずに滅ぼされる事になっている。

唯一の救いは、それら大国を治める神のほとんどが覇権主義でない事。

あるいは大戦に発展した場合お互いに理不尽な法則の押し付け合いになって不毛であるとか分かっていてからこそからかもしれない。

なんにせよ、他所でやってくれ案件である。

話を戻そう。

私の話だ。

私は生まれ落ちた瞬間に「トラム」と言う名前が与えられ、女神となった。

目の前にあつたのは島国、そして……こう言つては何だが野蛮人達。

彼等は野蛮ではあつたが、それ故に自分達を救つてくれる神を望んでいた。

その願いが結果的に私を生み出した訳だ。

そんな彼等は私に願う。

私を降臨させるために精一杯築き上げた神殿に向かつて願う。

「どうか、私達を導いてください」と。

イヤお前、こつちは便宜上女神だけど、中身は普通の男子高校生だったんだぞ？

成績はオールB、可もなく不可もなくって感じだった。

特別知識があつた訳ではなく、しかし幅広い知識を浅くフオローしていた、そんなど

こにでもよくいるようなオタクだった。

そんな私に、こんな絶賛戦国時代な世界で人々を導け、と？

無理だろ——とは言えなかつた。

生来俺は臆病で、そしてそれは女神な私になつても変わらなかつた。

だからただ、首をかくかく縦に振る事しか出来なかつた。

神殿の中で、誰に見られてもいないのに。

そして私が始まつた事と言えば——この国を守るための『法則』を流布する事だ。

それは私の性質が関係するのでそれこそ女神（トラム）が産まれた瞬間に発生したも

のだったが、兎に角最初にやった事と言えばそれだ。

気づけばこの国には『法則』が敷かれていた。

「外国に攻め込んではいけない」という法則だった。

専守防衛かよ、割かし穴だらけの『法則』では？

最初はそう思った。

ていうか当然臣民からの不満も発生した。

これじゃ防衛一線でいずれ滅ぼされるだけじゃねえか、と。

しかしその不満は、防衛戦を20回ほど成功させてから完全になくなる事となる。

逆に言ううとそれほど攻め込まれている訳だが、どれもこの国はほとんど消耗をするこ

となく防衛に成功している。

結果、『法則』の有用性が証明されて臣民の私への目は変わった。

なんか、キラキラした目で見えてきた。

やつぱり自分達が呼び出した女神は凄かったと言わんばかりの目だった。

やめてくれえ、私はそんな凄い女神じゃないから。

ていうか頑張った兵士達が凄かったただだから。

そりゃあ女神。パワーで武器を供給したけどさあ。

専守防衛という目的の為なら幾らでも武器を供給できるので、そこら辺は確かに凄い

点ではあるけれども。

兎に角、頑張った兵士達を労ってくれ。

そう言つて酒とか美味しいご飯とかを振舞つたら、またなんかお祭り騒ぎになつた。
なんですか？



戦神【シンソウ】が曰く。

「あの女神の存在はそれこそ彼女が生誕した時から知っていたとも。

当たり前だがどのような国も最初は石ころのように小さく、しかしそれは石ころとは真逆に磨かれれば磨かれるほどにそのサイズは大きくなる。

無論、砕け散り無くなるものもあるが、それはぶつかり合つた国に吸収合体される訳だから国が大きくなつたという見方も出来るだろう。

しかし、彼女の国は彼女が産まれた瞬間にその性質を手放した。

「外国に攻め込んではいけない」という性質がある以上、彼女の国【銀幕】は未来永劫拡大する事は絶対でない。

そんな国は他国にとっては格好の餌に見えたのだろう。事実、拡大する事のない国は小さく、弱い。

だから容易に攻め落とせると、そう考えるのは当然だ。

しかし彼女は、幾度となく戦線を突破してきた。

否、突破ではなく、打破と言うべきか。

兎に角彼女はその力を以ってして臣民に力を与え、【銀幕】を守り抜いた。

その手腕は称賛に値するし、彼女が産まれた時代がもう少し早ければ、恐らく戦神——戦の神の名は彼女のモノとなっていただろう」

流石パンジャン汚い

我らが【銀幕】はすべての戦に勝利を収めていて、それが原因で信仰度はマックスな訳だったが、しかし何かの拍子でそれらが失われてしまう可能性がある。

政略で失敗したりした時とか、一気に不満が噴出して「あのクソ生意気な女神排除しようぜ」って事で下剋上。

そんなでもって討ち取られてみんなの公共慰み者に。

おおう、そうなたら最悪だあ……

と言う訳でとにもかくにもみんなからの信仰度を上げつつも情操教育を施し逆らうという気持ちか湧かないようにしないといけない。

基本的に政策というのは与えるか奪うかのどちらかをする事によって反逆心を奪うのだが、私が取ったのは与える方だった。

教育の効果が出るのは子供が大人になってから、そしてその大人が子供を産みその子供が教育機関に入ってから。

長いスパンを経なくてはならないが、しかしその効果は絶大だ。

と言う訳で早速【銀幕】中に教育機関を設置。

教育を始めるのだった。

それと同時にこの世界のエネルギー事情の研究も開始した。

現状、私の神様パワーでこの国の防衛力は賄われているが、そのパワーはいつ失われてしまうかも分からない。

そもそもその神様パワーはどこから生まれているのかが分からないのだから、そんな意味不明エネルギーに依存しているのはかなり危険である。

と言う訳で、完全に神様パワーに依存しないエネルギー開発も行う。

幸いと言うべきかなんというべきか、この国には『ミスリル銀』の鉱脈が多数存在していた。

『ミスリル銀』というのは莫大な魔力を蓄えた銀の事で、広大な鉱脈が見つかっているのは現状「銀幕」だけである。

まあ、それがあつたからこそこの国は「銀幕」って名前がついたのだが、それはさておき。

調べてみたところ、現状の掘削スピードから考えるに数百年後には間違いなく枯渇する量の『ミスリル銀』。

しかし将来的に『ミスリル銀』が大量消費される可能性もある。

なんにせよ、これまた神様パワーと同じように、いずれ底を突くと分かっているもの

に依存するのは危険だ。

やはり何か再利用可能なエネルギーを発見する必要があるだろう。

……人間も不思議だ。

この世界の人間はファンタジーのお約束の魔法を使う事が出来る。

しかしその魔法を行使する時に発生するエネルギーはどこから得ているのか。

少なくとも魔法を使うと体力が奪われているみたいだが……？

エネルギー問題。

将来的になくなるかもしれない資源。

考える事は沢山だった。

しかし問題は次から次へとやって来る。

そしてその問題は海の向こう側からやってきた。

「ぜひ、我が国で収穫する事が出来るこの果実、『ゾルク』を購入していただきたいのです」

【銀幕】からやや離れた位置にある海に面した国、「グローリア」。

その大使が、我が国に『ゾルク』の輸出を申し出た。

しかし『ゾルク』ってなんぞや。

そもそもめっちゃ安い値段で売って来るのはなんでやねんと首を傾げると同時に不

穏なものを感じた私は、ひとまず神様の権能を使って自らの分身を生成。

それに自身の意思を移し、実際にその『ゾルク』を食べてみる事にした。

めっちゃハッピーな気持ちになった。

ご飯が美味しい、空気を吸っているだけでなんだか心がふわふわする。

不安なんてすつ飛んでいった、自分が最強に思える。

いまなら何でも出来そうな気がしたし、何よりもつと『ゾルク』を食べたいと思った。

——そして、それを食べなくなつて訪れたのは案の定と言うかなんというか、禁断症状だった。

身体を走る痛み、痒み、飢え、乾き。

視界が真っ暗になり常に不安と恐怖が心を支配する。

それを救ってくれる唯一の物は、『ゾルク』。

その時点で私はその分身を破棄し、元の身体に戻つた。

溜息。

がつつり麻薬やんけ。

その兆候が出たのはかなり後。

大体一か月継続して『ゾルク』を食べ続けた頃、自覚症状が始めた。

最初は「なんだか気持ちいがぼかぼかするな？」程度だったが段々とその気分が強くな

り、そして絶った途端に禁断症状が出た。

これはあれか。

あれなのか。

麻薬で国を内側から腐敗させ、そして最後に戦争を吹っかけて支配するっていうあのあれか？

ブリカス仕草って奴なのか？

そうなる为例の「グローリア」は「銀幕」の支配を目論んでいる事になる。

それはかなり、厄介だ。

なんだかんだで例の国は大国である。

とはいえ幸い「銀幕」の不敗伝説を聞いたのか実際に戦争を吹っかけては来ていない。しかしだからといってこんな手段に出てくるなんて。

なんてクソなんだあと頭を抱えると同時に、これをどうにかして利用できないかとも思った。

麻薬麻薬と一言で言うが、しかしそれは人体に悪影響が出るからそのように言われているのであって、実際麻薬は『薬』と書かれている。

そんな訳で、実験を開始。

どうしたら麻薬成分を無毒化出来るのかを研究する。

今のところ具体的な実験施設はないので兎に角回数を重ねた。

炙ってみたり燻ってみたり、蒸かしてみたり、燃やしてみたり。

水に晒したり、酢を掛けてみたり。

兎に角いろいろ試した。

そしてその試行回数が1000回を超えたあたりで、ようやく私は『ゾルク』の無毒化に成功したのである。

それは、砂浜に埋めて一か月ほったらかしにする事。

それにより完全に麻薬成分が消え去り、ただの美味しくて食べると少しだけハッピーな気持ちになる果物になる事が判明した。

と、それが分かったのでさっさと安いうちにと『ゾルク』を輸入。

国内に流通する時は勿論、無毒化作業をした安全なものである事を前提とし、そしてそれには「トラム」印の焼き印が付けられた。



智神「ソラス」が曰く。

「彼女のその知的好奇心には目を見張る物がある。

僕はあくまで目の前にある不可思議な現象にのみそれらが発揮されるが、しかしながら彼女は違う。

どうやら彼女は僕らと違つてその好奇心の矛先を制御しているみたいなんだ。

それは学者が生きていく上で必要な技術であり、なかなか修得する事が出来ない、あるいは僕みたいに一生習得できない者もいる。

兎に角、彼女はそれと文字通り人並み外れた熱意を以てして【銀幕】にメリツトのある情報を捜査し、吟味し、獲得してきた。

あるいは彼女は誰よりも学問に対して無関心であり、学者としての資格を持っているのかもしれない。

ただ——僕とはあまりウマが合わなかったのも事実だ。

僕みたいに好きな事だけに熱中するという事を、彼女はあまり好きではないみたいだったからね」

対外的な脅威に備えよう!

一応我らが【銀幕】の政略は上手くいっていると思う。

政治的不満を抱く者はいないし、ていうかなんなら私の為に命を捧げようとするものまでいる始末。

あの、生贄はいらないんで。

むしろテンション下がるのでやめてもろて。

とはいえ、【銀幕】には致命的な欠陥があるのも事実だ。

これは私が転生者であるからこそ発生した事であり、だからどうやつてもそれを改善したりする事は出来ない。

それは、魔法への理解だ。

不思議エネルギーを消費して発生させる事が出来る摩訶不思議な現象。

そしてこの世界ではとても一般的な技術でもある。

……私は神様パワーに関しては何感覚で行使する事が出来ているが、しかしそれは魔法ではなく神様全員が標準装備している技術である。

そして人間が扱う魔法に関しては何さっぱりであり、だからこそ人間に魔法の技術を与

える事が全くできない。

例えば戦神【シンソウ】が治める【フハ】。

あそこでは【シンソウ】が臣民に『神器』と呼ばれる武装を与えている。

『神器』というのはマジックアイテムだ。

魔力を与える事によって摩訶不思議な現象を引き起こす事が出来、それを用いて国防を行っているのだ。

それらは人によつては悪龍すら滅ぼす事が可能だとも聞く。

その悪龍の知識はないのだが、兎に角強力なモンスターなのだろう。

対し、我らが【銀幕】の自衛手段はどうなっているのか。

完全に現代武装である。

戦車、航空機、銃、爆弾、その他いろいろ。

物理攻撃であり、だからゲーム的に言うのなら『物理無効』効果を持った敵が現れたとすれば確実に終わる。

とはいえ現状例によつて【銀幕】は島国なのでこれら戦力を100パーセント行使する機会はない。

それは不幸中の幸いと言えよう。

まあ、100パーセント使うような事態になった時点で我らが【銀幕】の敗北とも言

えるが、それはさておき。

兎に角、自衛手段を強化しなくてはならない。

まず、何を中心に強化しなくてはならないのか。

——私はこれに関しては対空戦力と対海戦力を率先しなくてはならないと思ってる。

これはとても単純な理由で、この国にやって来る為の手段が主にそれらだからである。

魔法に関しては完全にさっぱりなのでノータッチ。

兎に角物理で殴る事を優先する。

……対海戦力として、私はまず戦艦を生み出した。

世の中は今、大艦巨砲主義ですぜ兄貴。

というのは冗談として、その戦艦は航空機を飛ばしたり魚雷を撃つたりする事が出来る特別仕様。

あの戦艦大和やアイオワのサイズを軽く超える400メートル級！

名前は『素戔嗚』！

どうしてそれだけ大きいのに平気な顔して浮いて、そして動く事が出来るんだと思うかもだが、それに関しては例によって神様パワーである。

神様パワー、しゅごい。

そして対空戦力。

それに関してはとても単純に対空ミサイルを配備する事にした。

名前は『八咫』。

一応理論上は大陸まで届くようになっていたが、果たして本当かどうか……

とりあえず試験として時折【銀幕】の上を通過する謎のドラゴンを撃ち落としてみたが、うん。

しっかりと機能している。

とはいえガチの対空兵器の目標は私と同じ神様パワーの宿っている攻撃だろう。

それに私の『八咫』はしっかりと効いてくれるのか、それはそれこそやってみないと分からない。

あー、不安だ……



賢神【クイント】が曰く。

「かの国の特殊性に関しては貴方も知っているでしょうけど。」

特に件の『八咫』に関しては驚きの一言に尽きますわ。

一射が瞬間間に大空へと舞い上がり、悪龍『アビス』を撃ち落とす様を見た時は思わず絶句してしまった事をここに白状しましょう。

普通、あれってそう簡単に撃ち落とせるものではないと思うのですが。そしてそれを一秒間に何発も撃ち出せるというのだから驚きです。

……ですが、彼女は自身の特殊性に関して全く無自覚。

それが唯一彼女の欠点であり、突くべきセキュリティホールでしょう。

特殊性は時に武器となりますが、それを自覚していないのならば宝の持ち腐れも良いところ。

むしろ自身の足を引っ張る枷にすらなりえる。

いえ？

わたくしは彼女とは長く良い付き合いをしたいと思っておりますよ？

だって、馬鹿な子ほどかわいいと言うでしょう。

それに、彼女はとも、とても利益をもたらしてくれますから。

精々、わたくしの「グローリア」の為に働いてもらおうとしましょう」

銀幕茶会事件

ところでコピ・ルアクと呼ばれる高級な珈琲をご存じだろうか？

これはジャコウネコと呼ばれる猫を用いて作った珈琲の事だ。

ジャコウネコに珈琲豆を食べさせ、そのお腹の中で消化酵素や腸内細菌による働きによつて発酵させる事により得も言わぬ薫りを醸し出すようになる。

元々は珈琲豆畑で働かされていた奴隷達がどうか自分達をこき使っている人間達と同じものを味わいたいと思ひ、糞の中から消化されていなかった珈琲豆の種を回収して利用した事が始まりとされる。

……現代では、劣悪な環境でジャコウネコに無理やり珈琲豆を大量に食べさせてコピ・ルアクを作らせようとする者もいるとか。

さて、私という神は存在こそ神様だが、しかしその内面は間違ひなく人間のそれである。

だからこそ出来ない事が沢山ある。

他の神様は本当に神様らしい精神性をしていて、だから私からしてみれば理解不能な事を平気でやったりする。

しかし私にはそれが出来ない。

冷徹な心でもつてして、臣民の為に行動をするというのがなかなか出来ない。

現代兵器に依存しているが、しかしそのハイエンドたる非人道的兵器——A（アトミック）B（バイオ）C（ケミカル）兵器の使用を私は忌避している。

忌避しているから、生み出す事が出来ない。

いや、きつとこの「銀幕」が滅亡の危機に瀕した時、私はその時になってようやくそれらを解禁出来るだろうけど。

だけどそうならないようにするのが一番だ。

戦争は不幸しか生み出さないし、戦争になつたら確実に勝てるという自信もない。

戦争を仕掛ける事はまずないので、だからこの場合考えなくてはならないのは戦争を吹っかけられないようにするためにする事だ。

そして現状、我々が「銀幕」には『ミスリル銀』があり、それを理由に戦争を仕掛けられる可能性は十二分にあり得る。

『ミスリル銀』は我が国の重要な資源だ。

だから簡単に貿易に流す訳にもいかないし、しかしここで独占しても反感を買う可能性がある。

その埋蔵量は秘匿しているけど、しかしこの神様がいる世界において情報戦に特化し

ている神様もいるし、それが神様パワーでこちらの情報をリークしてくるかもしれない。

難しい。

いつその事なかった方が——いや、資源がない国は戦争で他国から奪う事でしか資源を得られない。

この世に情けはない、とは言えないけど。

だけど基本自分が第一なのだから。

だから、大切に使わないと。

勿論、我らが【銀幕】の特産品はそれだけではない。

例えば、米。

いわゆるライス。

しかし他の国ではあまり馴染みのないものなので、これを貿易品に使えはしないかと思う。

売ってブームを巻き起こせる可能性は——博打だな、やめておこう。

売り物と言えば、やはりお茶だろうか？

【銀幕】のお茶は基本的にそのまま収穫して乾燥させたり、燻ったり、煎ったりして飲む。

お茶の葉自体は外国にもあるが、質は「銀幕」が最も誇っている要素でもある。

やはりまず売り物にするとしたらまずはそれだろうか？

と、言う訳で早速「銀幕」のお茶を輸出する事にした。

【銀幕】で解放されている数少ない貿易港の一つ、『白洲港』。

その者達に伝達し、お茶の葉を他国へと輸出する事を決定した旨を伝えた。

で、その一週間後した後。

「グローリア」のカスどもがお茶の葉を海に投げ捨てたようですが、どうしますか！」

ええ……（困惑）

なにやっつてんのあの国の商人。

いやまあ、その商人が勝手にやった事だろうしだからそれを「グローリア」のあれこれに繋げるのはナンセンスだってのは分かっているけど。

いやでもあの「グローリア」だしなあ。

ていうかなんでそんな事やったし。

「なんでも、これは「グローリア」で販売されている物品、その『ロイヤリティブランド』を侵害しているとかなんとか」

あー、『ロイヤリティブランド』ね。

それは「グローリア」が世界中に広げようとしている、前世で言うところの特許権で

ある。

一応建前はその国が研究し、築き上げた技術の成果は保護されるべきであり、それを得る為には一定の対価が必要だとしている。

それ自体は確かに正しい事だし、実際守るべきものは守るべきなんだろうけど、しかし【グローリア】はそれを悪用して丸儲けする気満々なんだよな。

ていうかそもそも『ロイヤリティブランド』の申請及び認定は買神たる【クイント】のみが出来ると言っている時点でアレである。

金儲けの事しか考えてねえ、こいつら。

そしてその商人はその『ロイヤリティブランド』を理由に難癖をつけてきたという事だ。

なんていうか、うーん。

どうしよう。

具体的に言おうと、そいつの事どうしようか……？

「勿論、我らが【銀幕】の中で馬鹿な事を抜かす愚か者の後始末は我々が既にしておきました！」

……

……………え。

「愚者の末路は海の藻屑と鮫の餌に相場が決まっていますね！」
……マジで？

それから数日後。

「いかなる理由があつたにせよ、我が国民を害しあまつさえ殺害するのは到底許されるべき行為ではない。遺族への補償を含め——の賠償を要求する」

「グロリア」からの理不尽なまでの膨大な賠償請求。

それを拒否するなら「銀幕」に対して開戦をするという半ば脅しのような宣言が出された。

質神「クイント」の権能——『黄金の天秤』。

商売の神らしい能力。

いろいろと制約はあるらしいが、彼女が取り決める事に成功した契約が相手の意思により破棄された場合、絶対的な審判権を得る事が出来る。

そしてこれは今回の賠償請求にも通用する。

理由は何にせよ、国民を害し殺害したという建前を以ってして、彼女は「銀幕」に対

し多大なる賠償を支払う義務があるという契約を押し付けてきたのだ。

つまり、今回私がこの賠償請求を呑まないと彼女は絶対的な力を得、【銀幕】に襲い掛かって来るといふ事だ。

ええ……？

開戦の狼煙

〔グローリア〕は大前提として大国である。

数多な国をブルドーザーの如く轢き潰し、自身の配下にしてきた。

それはつまり、〔クイント〕が扱う権能は『黄金の天秤』だけにとどまらない事を意味する。

……神は死ぬ時に、否、殺された時に殺した相手に恵みをもたらす。

それが神の場合、それは権能の形をしている。

もちろん、本来の形より幾分かダウングレードされているだろうけど、しかし相手はかの賢神〔クイント〕である。

下手するとそっくりそのまま奪っている可能性がある。

……唯一の救いは、〔グローリア〕は未だジャイアントキリングを成し遂げた事は一度もないという事。

全て当たり前のように自国より弱い相手に戦争を仕掛け、そして勝利してきた。

だから、奪取した権能は間違はなく『黄金の天秤』より弱い。

ダウングレードする前から、そして今はもっと弱体化しているだろう。

とはいえ、結局「グローリア」が大国であることには変わらない。
人的資源含めて資源が豊富。

そこから物量で攻められるのは単純に厄介だ。

そもそも我らが「銀幕」は防衛しか出来ない。

無論、防衛という名目で敵地を攻撃は出来るが、そうすると若干のデバフがかかる。

権能ー『守鶴』。

防衛特化の権能であるこれにはある特性がある。

それは、自国が弱まれば弱まるほど、権能によって生み出された武器の威力、能力にバフが掛かる。

端的に言う、侵略行為にさらされ続けられるほど、我らが国は強く堅牢になつていく。

だから、味方がおらずこれというパイプラインもない国だけど、実は相手が息切れするまで待ち続ける戦いはむしろ得意なのだ。

……そして恐らくだが。

それは「グローリア」の「クイント」も理解している。

権能の全ては把握しきれていないだろうが、それでも今まで「銀幕」が経験してきた戦争の記録は読み込んでいるだろうし、そこから我らが国が持久戦に強い事を推測して

いる筈。

戦いが長引くほど疲弊していく国と、強くなっていく国。それを理解しているなら、取るべき戦法は一つだけだ。

即ち――先制必殺。

初手で本命を投入してくるに違いない。

しかし、どんな攻撃か。

我らが国は島国。

地続きの隣国を攻め落としてきた時に使った戦法は使えない。

この世界にはドラゴンがいるのは判明しているし、それに乗って攻めてくるのか。

それとも船で来るのか。

……どれも決定打に欠ける、と思う。

相手は神だ。

常識外の化け物。

それがしてくる必殺の一撃とは？

「敵国【グロリア】より熱源反応あり！ 超高速で【銀幕】に向かっていきます」

果たして――

やはり、と思った。

魔法。

あるいは神の審判。

私にとっては天敵、乗り越えなくてはならない一撃だ。

防衛システム『かまいたち』は告げる。

後1分で首都『鶴舞』に落ちる、と。

迷う猶予はない。

……確実に迎撃する。

『神風』、空間把握の手は止めないように。

「りようか〜い」

『養老』、撃墜したときに発生するであろうすべての余波に備えて。

「ん〜！」

そしてー私は二人の『かまいたち』と感覚をリンクさせ、飛来するそれ、火球を睨みつける。

手に握られているのはこの国で唯一の、神様パワーの兵器としか説明のしようがない武装。

『草薙』と名付けられた刀を、抜刀。

ー刹那、上空から降ってくる脅威を『草薙』が切り裂いた。



「なるほど、興味深いですわ。」

……『沈む太陽』が不発に終わりましたか。

まあ、初手で堕ちてくれるほど生半可な国ではありません、ね。

これに関しては素直に【銀幕】の【トラム】様を褒めるべきでしょう。

銀溢れる豊穡の国。

そしてそれを守護するのは豊神【トラム】。

是非とも我が国とこれからも交流させていたいただきたいですね。

そのためにも、美しき白鶴は翼を折らなくては。

——『昇る月』部隊を出撃させましょう」

天岩戸

『かまいたち』システムのお陰で【銀幕】への被害はゼロで収める事が出来た。

私の『草薙』があればもう一度あれが飛んできたとしてもある程度は撃墜する事が出来るだろう。

そして何よりだが。

ん……権能『守鶴』の力が強まっていくのを感じる。

攻撃、しかも下手すれば【銀幕】が滅びかねない一撃を食らった事により、権能の効果が上昇した。

今だったら更なる武装の解禁が出来る事だろう。

私はとりあえず海岸線で待機している自衛部隊に対してリソースを割く。

彼等は文字通りの防衛線であり、彼等が突破されたら後は国内での戦闘となってしまう。

そうなると臣民の、しかも非戦闘員の血が流れる事となり、そうなったら私は迷う事なく降伏を宣言する事になるだろう。

しかし敗北は臣民達の地獄の始まりを意味する。

そもそもあの「グローリア」が私を殺した後、何をこの国の住人に強いるのか分からない以上、迂闊に降伏は出来ないのだ。

だから、戦う。

最悪の可能性を考えながら。

……ぶつちやけて言うのならば。

もつと手つ取り早い選択肢は沢山あるのだけれど。

だけどそれを取る事が出来ない。

何故ならば――

「将軍様！ 海中より「グローリア」の戦力と思われる個体が複数存在する事を探知しました！」

……よろしい、それでは『素戔嗚』を投入しなさい。

すべてを蹂躪して上げよう。

問題はその敵性個体がどのようなものなのか、だけど。

「それは、その。きよ、巨人です！」

巨人？

……間違いなく「クイント」の権能由来の代物なのだろうけど。

私は『神風』の力を借りて海岸線で戦う自衛部隊の戦闘の様子を見る。

そこでは確かに報告通り、巨人との対戦が行われていた。

もつとも、どうやら巨人達も上陸しなければまともに戦う事が出来ないらしく、手に持った三又の槍を振り回しているが、どれも決定打には至っていない。

バチバチと紫電が迸ってそれが自衛部隊の人達を傷つけようとするが、それらは私が与えた『守鶴』の加護によって守られている。

だから、割と戦闘は一方的だった。

それはさながらガードを固めている相手に小キックを小刻みに当てて防御をゴリゴリ削っている格闘ゲームの一シーンのよう。

如何せん、巨人の防御はとても硬いのでこちらも致命的なダメージを与えるに至ってはいいないが、それでも負ける事はない。

負けないから、いずれ勝てるのだろう。

ジリ貧だけど、それは確かなのである。

……しかし、拍子抜けというかなんというか。

てつきりもつと凄い攻撃をして来るかと思っていた。

いや、確かに最初のあの火球は脅威ではあったが、第二陣となるあの巨人の侵攻はインパクトが弱い。

まあ、地続きだったら間違いないと踏みつぶされていたけど、「銀幕」は島国であり海と

いう鉄壁の防御で守られている。

それは臣民達の動きも封じるが、それでもメリツトの方がより大きい。

そしてそれは、きっと「クイント」も理解していると思うのだけれど……

あるいは。

もしかして、まさか「グローリア」も長期戦を、望んでいる——？

「あら、意外と早いお気づきですね」

……そして、それはあまりにも唐突に私の前に現れた。

亜麻色のロングヘア、若草色の瞳。

白を基調として金色の装飾が華美にならない程度に施されているドレス。

頭の上には、王冠が乗っかっている。

そんな、彼女の名は——

賢神、「クイント」。

「ごきげんよう、「トラム」様。本日は貴方に提案をさせて貰うためにこの城を訪れました——ああ、先に断っておきますが、この身体はあくまで分霊。害を為しても意味はありませんからね？」

あくまで余裕の笑みを浮かべているが、しかしどういう事だろう。

提案？

戦争の最中に、それはもしかして降伏の勧告か？

「いえ、いえ。別に降伏をしてくださつても構いませんが。しかし貴方はそれを望まないでしょう？ だからここは一つ、こちら側のいくつかの条件を呑んでいただければここで終戦にして差し上げてもよろしいと、貴方に提案しに来たのですわ」

……

どうせロクでもないのは分かる。

多分、不平等条約の定番、領事裁判権の承認や関税自主権の放棄だろう。

あるいは、私の政治的関与力をなくするのが目的、か？

なんにしても、分かった。

そもそも、だ。

恐らくだが、「グロリア」は我が国に戦争で勝とうとは思っていない。

あくまで負けるかもしれないという恐怖を植え付け、そこで不平等条約を結んで終戦と言う形で戦争を終わらせるというのが筋書なのだろう。

インパクトの強い一撃。

……巨人の襲撃だって決定打には欠けるけど衝撃は強い。

普通だったらあそこで折れていたかもしれない。

「ただ、我が国は戦える。」

「わざわざ不平等な条約を呑んでやる理由はない。」

「ですが、しかし。このまま戦ったところで貴方に利はないのではなくて？　いえ、こう

言い換えましょうか——貴方は我が国に勝つ気がない」

……

「あるいは、人を傷つけられないという事でしょうか。とても可愛らしくて愛でて上げたいくらいですが、しかしわたくしには理解出来ませんわ——どうして、貴方はその力を以ってして覇を唱えないのか」

……それは。

「確かに貴方は『守鶴』により敵国に攻め込む力はないと、そのように定義しているみたいですが。しかし別に「敵国を攻撃してはいけない」訳では、ないのでしょ？　自衛のために、敵国を滅ぼすという事も、出来るのでしょ？　むしろ、ええ。防衛の為に言うのならば、率先して敵国の攻撃能力を奪うために貴方側が攻撃を行うべきではなくて？」

……

「しかしそれを貴方はしない。出来ない。それはつまるところ——貴方は人間を傷つけるといふ行為に対して忌避感を覚えているという事。違いますか？」

確かに、それは——
だけど。

「ただ、耐え忍ぶ。耐え忍ぶ事が出来る。その堅牢さは確かに賞賛すべきでしょうけど。しかし貴方のその性質はあまりにも、脆弱が過ぎる。セキユリテイホールではなく、抜け穴ですらなく、ここを利用してくださいと言わんばかりに開けている——ですから、「トラム」様、これはビジネスです。わたくし達「グロリア」と手を組みませんか？」
……

「わたくし達が手を組めば、きっと世界に覇を唱える事が出来るでしょう、ええ。とても簡単な事でしょう。勿論貴方達にも利はありますし、あると保証しましょう。ですから——」

わたくし達と「仲良く」しましょう？

そのように言いたかったのかもしれない。

しかし、出来なかった。

「……ッ」

彼女の表情が、歪む。

それを見、私はどうやらプロトコル「ニュートンの林檎」が成功した事を察する。

「い、一体何が……！」

【グロリア】にあるゾルク農場の中でも最も巨大なものは300ヘクタールほどのサイズがある。

無論、人だけでは管理する事は出来ず、いや、むしろ工業化が進み今では無人で外部からの操作によつて動く魔導機械によつて管理がされている。

だからこそ、格好の狙い目だった。

それは、光だった。

一筋の光が、空からぼたりと落ちてきた。

一直線にゾルク農場の中央に着弾し——轟音が鳴り響く。

爆風、衝撃波、人がいれば間違いなく跡形もなく消し飛んでいた事だろう。

それはゾルク農場のあった場所に巨大なクレーターが出来た事からも分かる。

一夜にして【グロリア】最大の農場は——空から降つてきた何者かによつて消し飛んだのだった。

「い、一体何をしたというのですかっ！」

動揺している「クイント」の分霊に答える。

——私はあくまで手を離しただけだ、と。

「な、なにを……？」

この星の衛星軌道上に存在する人工衛星——通称『黒騎士』。

それからおよそ小型のトラックくらいのサイズの合金球が、分離されたのだ。

便宜上、それを私は『ニュートンの林檎』と呼んでいる。

私は確かに攻撃は出来ないけど。

あれはただ私の指示で分離され、たまたま「グローリア」の大地に墜ちただけだ。

「き、詭弁を……！」

確かに私は人を殺す事が極端に苦手だ。

神であるのに平凡な人間だった頃の感覚が残っている所為で、未だに非情な判断を下す事が出来ない。

その影響は権能にも及び、人を殺す行為でただで結構なデバフが入るけれども。

星の裏側にいる人を殺す事は出来なくても。

星の裏側にいる人がたまたま傷ついたところでちよつと心が痛むだけなのだ。

それに今回は例の『ゾルク』農場が目当てだ。

人がいない事は確認済みだし、そしてあんなものを大量に流通させている方が世界にとって害だ。

そういう大義名分もあるから、私は大手を振って『ニュートンの林檎』を操作した。そして――

「……」

どうやら彼女も異変に気付いたらしい。

自分と本体とを繋ぐパスが切れた事を。

対神用結界プロトコル『天岩戸』。

私を基準に作っているし、そもそも神様パワーはブラックボックスが多過ぎるので不完全な代物だけだ。

分霊程度ならば捕縛できる、それが今、確認された。とりあえず、私には研究が必要だ。

神様パワー、権能、そもそも神様そのものの事を。

だけど私自身を調べ続けたところで限度がある。

だから、新しいサンプルが必要なのだ。

うん、と言う訳で貴方にはこれから研究対象になって貰う。

ついでに、今回の攻撃で「グローリア」も我らが「銀幕」を脅威に思った事だろう。降伏しても、良いんだぜ？

「ハ、ハ」の……」

唇を噛み幾つもの言葉を飲み込んだのち、彼女はきつと私を睨みつけて言う。

「くっ、殺しなさい……っ！」

姫騎士のテンプレートみたいな事を言われても。



それから数週間、巨人達の侵攻が続いた後。

その後、唐突に「グローリア」から「銀幕」に対し公的に講和条約の締結のための会谈を開く提案が出された。

神々の遊戯

そしてあまりにもあつさり講和条約は締結された。

というか、そもそもこちらに非はないしを通し抜けたことに驚いている。

最終的に今後も変わらない貿易を続けさせてほしいという要求はされたが、それ以外はこちらに有利な条件を呑んでくれた。

こちらに不利なことは一切要求してこなかったし、むしろこちらに利があり過ぎていくくらいだ。

恐らくだが、別に例の『ニユートンの林檎』によって国土を爆破された行為に対しては大したことは思っていないと思う。

あの国は大国、ちよつとくらい国土が消滅したくらいで痛くも痒くもない。

いやまあ、貿易の神なので多少痛みを感じてはいるかもだけど。

それよりも、彼女にとっては自身の分霊を奪われたことの方が大きいだろう。

それは恐らく彼女にとって初めての事。

未知の体験は底知れないからこそ脅威であり、それを経験してしまった時点で私が空恐ろしい相手として認識され始めた事だろう。

だからこそ、彼女は分霊の返還を求めなかった。

恐らく、なにされているか分かったものじゃなかったからだと思う。

兎に角、そんな訳で条約は締結された。

とはいえあちら側は先に『あまりにも大きい賠償物』でこちらを黙らせにきたので、こちらもあり余計に要求は出来なかった。

まあ、平和が第一。

戦争が終わったならばそれで良い。

そして、私は「銀幕」に残されたものの後始末に手を焼いているのだった。

まず、例の分霊。

これに関しては嚴重に縛ったは良いけれども、この後どうすれば良いかで悩んでい

る。
色々使える資源だから大切に扱わないと、とはいえ今はやる事が決まっておらず、
持て余している。

それよりも、「グローリア」から貰った賠償物の方が問題だった。

……それは、神だった。

あるいは、元神というべきか。

「クイント」が滅した国のうち、捕虜としてそのままにしていた神を一柱、渡されたのだ。

これ、厄介物を押し付けられたか？

一瞬そう思ったが、しかしまずはその神と会ってみない事には始まらない。

「はじめまして、【トラム】。私の名前は【ティア】、だよ」

彼女はかつて【ソーラ】を統治していた神だ。

またの名を母神。

高校生くらいの外見年齢の神だ。

真つ黒な髪を細く長いツインテールにしている。

特徴的なのは、その腹。

ふつくと膨らんでいる。

これは肥満というものではなくて。

「うん、この中に、私の赤ちゃんがいるの」

子持ち神を押し付けてきやがった……

ていうか神様って身籠るのか……

ていうか父親誰だよ……

「あー、その。お父さんはもう、いないんだ。死んじゃった」

とはいえ、彼女は精一杯の慈愛が籠った笑みを膨らんだお腹に向け、優しい手つきで撫でる。

「それよりも、『トラム』。あれはどうするの?」

あれつていうのは、つまりあれだろう。

むすつとした顔で正座させられている「クイント」の分霊。

「貴重なものだし、大切にしないと」

結構辛辣な事を言ってくるが、さておき。

私がつつと見ていると彼女はむすつとした顔のまま言う。

「わたくしに神としての何らかを期待しているのなら、裏切られる事になりますわよ。

そもそもわたくしは分霊ですし、国を離れ臣民を失った神に存在価値はありません」

てつきりヤケになっているのかと思つたが、しかし彼女の言葉には真に迫るものが

あつた。

どういう事かと尋ねてみると、代わりに「ティア」が答えてくれる。

「私達神は臣民達を導く倫理、道徳、常識だから。それが唯一にして絶対の存在意義で

あつて、だからそれがなくなつたらいないのも同義つて事だよ」

……言いたい事は分かつたけど。

だけどそれは悲しくないかな。

私達はこうして存在しているのに、誰かに存在意義を認められなきや存在する事が許

されないなんて。

そしてその言葉をふたりは少しだけ意外そうな顔をして聞いた。

「ティア」が言う。

「なんか、人間みたいな事を言うね」

そりゃあ元がそうですから。

とは、当然言えない。

曖昧な笑みを浮かべて誤魔化す事しかできない。

「もし、その性質が嫌なら私が『産み直して』あげても良いよ？ 私はそれが、出来るから」

さらっとそんな事を言つてのけるあたり、やはり彼女らは神であつて人間ではないのだなと改めて思うのだった。

永遠の典

「ティア」に関しては何とあえず後回しにしようかと思う。

いやまあ、彼女がかつて治めていた「ソーラ」という国がどのような国がどのようになっているのか分からないのでずっと放置しておくわけにもいかないのだけれど、現状彼女からリクエストはないので、とりあえず今は優先度を低くしておく。

問題を先送りしている訳ではない。

それでは何を優先して解決するべきなのかというと、やはり「クイント」の分霊たる彼女だ。

研究のし甲斐のある存在ではあるが、しかし手元に今も置いておけるといいうのがちよつと怖い。

賢神。

「クイント」。

経済、商売を司る神。

そんな彼女がメリットもなしにこれを私に寄越したままにしておくのだろうか？
何か裏があるのではないだろうか？

……とりあえず敵の敵は味方という事で、「ティア」に助言をもらう事にする。

「うーん、確かにあの神が何の打算もなしに行動はしないとは思う——私達神はそういうふうに出てくるのだし」

含みのある言い方に首を傾げる。

「神はそれぞれ人を導くための道理をつかさどっているでしょ？ 基本的にそれに則って行動するものだし、だから「クイント」は有り体に言ってしまうえば、経済を回す為に動いているとは思う」

なる、ほど。

そういう事ですか。

なかなかどうして、神様も不便な存在だな。

……っていう事は、「ティア」も自身の司る道理に従って行動しているっていう事か？
「あはは……私は名前の通り母神、だからね。子供を愛し、国民を愛する。その役割を果たす事はもう出来なくなっただけ、少なくとも私にはまだこの子がいるから」

この子？

「お腹の子、アダムと言うの。お父さんに似た強い子に育つと良いなあ」

ふーん、なるほど。

聞いた感じ、「ティア」はぶっ飛んだ奴が多い中でもまともな部類に入るのかな。

司る道理が強力で融通が利かないものであればあるほど扱える権能は強くなる傾向がある。

だからこそ、人間に近い思想を持っている彼女は結局、「グローリア」に敗北したのだらう。

そう考えると、儘ならないものだなと思ってしまう。

国を動かし、人を率い、政を行うためにはやはり凡人の思想を捨てなくてはならないの、だろうか。

「言っておきますけど、そういう事だからわたくしに出来る事はまったくくないし、むしろ物的資源として扱うのが正しいと思いますわ」

そしてさつきから何か言いたげな表情を「ティア」に向けていた「クイント」の分霊がおもむろに口を開く。

「本体から切り離されても、性質は変わりません。さながら海から水を掬い上げてても海水という本質は変わらないのと同じように」

確かに彼女に「グローリア」にとつて不利になるような事、あるいは我らが「銀幕」に利があるような事は出来ないだらう。

神様というのはそういう存在だから。

上位存在ではあるが、人よりも柔軟性に欠ける。

融通が利かないのではなく、そもそもとして出来ない。

あるいは人が何色にも染まる事ができる性質を持っているというべきか。

何にしても、彼女にこの国の運営の手伝いをさせるのはそもそも危険だし――

「う」

と。

その変化は唐突に訪れた。

「あ」

【クイント】の分霊の肌がぶくりと泡だった。

……次の瞬間。

「ぎ、ああああアアあつつつつつ!!?」

悲鳴。

彼女の存在が一瞬にして変化する。

……残されたのは、悍ましい化け物。

丸い球体に口が一つ。

八つの翼が重なるように、歯車のように生えている。

「そんな」

【ティア】が呆然と眩く。

「ゴッドイーター・ムーンセル
昇る月——どうして、それが……？」